

基督の教育法

留岡幸助

020566-000-4

特53-522

基督の教育法

留岡 幸助/著

M36

ABI-0380



特

52

EDUCATION PRINCIPLES EMBODIED IN THE
TEACHING OF JESUS CHRIST.
BY REV. K. TOMEOKA.

留岡幸助著

基督の教育法

東京
警醒社書店

223

248

基督の教育法

留岡幸助著



罪人の救はれると云ふことは、宗教に於ては、實に主
 要なる點である。稱して宗教は救であると云ふのは、
 即ちこれが爲めである。然れども如何にすれば救はれ
 るかと云ふことになる。なか／＼難問題である。佛
 法眞宗派の人々は、口で南無阿彌陀佛とさへ唱名すれ
 ば、焦熱地獄の苛責より救はれて極樂淨土に行かれる

と云ふが、我等の信する宗教の救は、而かく容易なるものではない。勿論「信するものに於て爲し能はざることなし」とは、基督の言葉であるけれども、唯信すれば夫れで高潔なる人物になれると思惟するは、寧ろ大なる誤謬である。現に保羅の一生涯は、信するのみにては、高潔なる人間になり得ない確實なる證據ではないか。信することによつて救はれると云ふことは、基督の福音である。併し救はれるまでに至る道程は、實に容易のことでない、故に保羅は「多くの艱難を経て神の國に至る」と云ひ、又基督は「天の父の完全さ

が如く爾曹も完全くなるべし」と宣ふたのである。基督の言已に此の如し、完全なる人間に達するまでには、元より幾多の修養を積まなければならぬ筈である。然らば、罪人の救はるゝ方法は何であるか、悪き人間を良き人間にするには、如何にすべきか。吾人をして言はしむるならば、唯教育的方法に依るより外に道がないのである。基督は如何にも完全無缺の救主であるに相違ない。けれども教育的方法に依らないで、罪人を救ひ給ふことは不可能のことである。今日我が基督教徒が、社會に勢力を有しないのは、畢竟宗教を私慾的

に信じて居るものが多いからである。余は敢て私慾的
 と謂ふ、其理由は、今の信者は、唯信すれば救はれる
 と云ふものにのみ重きを置いて、多くの艱難を経、多くの
 修養を積むで、神の國に至ると云ふ渴仰の深意に關
 しては、殆んど不問に附し去つて居るやうに思はれる、
 是れ豈に私慾的信仰ではないか。試に「オルソドキシ
 ー」を他力宗と假定するならば、「ユニテリアン」は自
 力宗である。余輩は宗教として、自力宗の「ユニテリ
 アン」を賛成することが出来ないと同時に、信すれば
 救はれると云ふことのみに重きを置いて、克己復禮の修

養を積まない「オルソドキシ」をも信することが出
 来ない。余輩は所謂「オルソドキシ」でもなく、又
 「ユニテリアン」でもない。然らば、汝の宗教の立場は
 何であるかと、かう詰問する人があるならば、余輩の
 答は至て單純である、明白である。余は「クリスチア
 ン」なりと言ふより外はない。換言すれば、余は基督
 の信者なりと言はざるを得ない。今更言ふまでもなく、
 分り切つた話であるが、罪人を良くすると云ふことに
 關しては、宗教は廣義に於ける教育であらんければな
 らぬ。

基督は勿論宗教家である。けれども此宗教家たる基督は、又教育家である。人を善良ならしむるに於て、神の力を喚ぶ上より云へば、基督は慥かに宗教家である。然れども、人力を盡して救を全ふせよと訓ふる點より云は、基督は又實に教育家である。故に余は今より教育家たる基督に就て、數個の點を列舉して見よう。

第一 眞正の教育は常に嶄新なる希望を與ふるのである。基督を大教育家なりと云ふ所以は、墮落の極、滅亡せんとする人間に「汝等悔改て福音を信せよ、然らば墮落したる汝等と雖も神の子たるを得べし」との一

道の光明を與へたる點である。教育家に缺くべからざるは、被教育者をして絶望せしめざることで、之を他の言葉で言ふならば、即ち教育を受くるものには常に嶄新なる希望を有せしめ、而して心の眞底より其人を奨勵することである。已に不完全なる人間であり、動もすれば人生行路の難を嘆じ易きものに對して、其希望を全滅せしめざるとは、實に此上もなき大切なることである。之を譬へんに、希望は恰かも不倒翁の如きものである。如何に浮世が涙の衢であり、如何に人生が不完全なるものであつても、尙一片の希望の光だに、

歌として胸中に閃いて居るならば、人は之に依て、總てを堪へ忍ぶことが出来るのである。宜しく正に七頭八起の氣象を養はしめ、所謂一難來る毎に、一倍し來る底の希望心を有せしめなければならぬ。希望は尙身体に於ける脊髓の如きものである。人は脊髓なくして直立し得ないやうに、人生に希望なくしては、終に難關を凌ぎ得ることが出来ない。故に教育家たるものは、常に此點に留意して、書生を訓導すべきである。

余嘗て十二年より終身までの刑期を有する犯罪者を、北海道の集治監に於て教誨し、基督の筆法を用ひて、

大に成功したとがある。重罪犯者は單り社會より擯斥せらるゝのみでなく、骨肉の親兄弟よりも、いたく擯斥せられ、終に自己の住する處は、恐るべき監獄より外に場所がないのである。終身と云へば、生き乍ら墳墓にあるも同様、監獄で身を終へねばならぬ。よし有期徒刑にして十二年若くは十五年を以て、幸に出獄し得るとするも、其時には、已に世に友なく、友に良き人なく、又歸るべき家すらもないのである。故に此の無慮十四億萬の人類中、絶望者を數へ來れば、犯罪者は蓋し其最なるものであらう。然るに是等絶望の極に

沈淪するものすらも、悔改めて正道に歸るならば、神の子となり得ると云ふ天來の大約束は、即ち此の犯罪者に非常なる勇氣を惹起せしめて、終に正道に復歸せしむることを得るのである。犯罪人に於て既に此の如しである。況んや普通一般の吾人を教育するに於ては、尙更のことである。滅亡に行くものに、永劫の生命を與へ、來今を通じて、神の子になると云ふ大希望を與ふることが、争でか大教育家でなくして、能く言ひ得らるゝことであらう。之を以て、オーゴスチンの如き、開闢以來無比の大放蕩家でも、翻然悔改めて基督を信

じ、終に聖オーゴスチンとなつたのではないか。米國の大盜賊チエリー、マコーレーの如きも亦基督を信じて、殆んど比類なき宣教師となつたのではないか。希望の、人を教育するに必要な、最早喋々を要せなす。是余輩が基督を大教育家なりと謂ふ所以である。第二、眞正の教育は愛情を發揮するのである。愛情の發揮を俟たずして、生徒に向て、いかに命令するも、訓誨するも、其効果は更にあるべしとも思はれない。教育は自奮自發を貴ぶ。自奮自發は、意思の力を鞏固ならしめないでは、到底出來ないことである。

此の意思の力を鞏固ならしむるは、無論種々の方法があるに相違ないけれども、愛情の興奮劑なくして、意思を活動せしむることは甚だ困難である。故にペスタロッチは生徒を教育するに當つて、教師と生徒との間に、慈愛の心と、感謝の念とを並せ起さしめねばならぬと云ふて居る。慈愛と云ひ、感謝と云ふ。其言ひ方は異なつても、其實質は慈愛に外ならない。教師に向つての感謝は、生徒の教師に對する慈愛である。生徒に向つての親切は、教師の生徒に對する慈愛である。故に曰く、眞正の教育は、愛情を發揮するのである。然

るに、今の教師なるものを見るに、上は大學の博士より、下は村落の先生に至る迄、眞正の愛情を以て、生徒を訓導するもの、其れ果して幾人かある。又大中小學に於ける幾百萬の生徒中、濃厚なる感謝の情を以て、教師に對するもの、其れ果して幾人かある。滔々風をなして一世の子弟多くは是れ腐敗漢、軟骨兒、師と弟との關係は、學問賣買の關係に過ぎないで、新聞紙上、所謂學校騒動なるものや、若くは教科書事件の如きもの、跡を絶たないのも、亦怪むに足らないのである。故に曰く、眞正の教育は愛情を發揮するのである。愛

情を發揮せずして、徒らに組織方法を講じ、原理原則を教ふるも、感化薫育の大事に於て、そもく何の補する所ぞ。斯かる形式的の教育は、寧ろ人の子を賊するものではあるまいか。ペスタロツチ曰く「慈愛なくんば希望なし」"The man without love, is without hope". と、實に至言である。余輩が前段に於て述べたる希望も、亦愛情なくしては、由つて起る所を知らない。このことに就きても、基督は最も凱切明快に教へられた。人は神に對して愛情を發揮し、神は人に對して愛情を發揮すると云ふ一點、是が即ち基督教倫理の楔子である。

故に「神は愛なり」と教へられ、「汝神を愛し、又人も愛せざるべからず」と宣ふたのである。「汝等互に相愛すべし」とは、聖ヨハネが其信徒に命じたる所で、人は唯神の愛を認識することに依つてのみ、墮落の狀態を脱して、善良なる境遇に進み得るのである。愛は凡ての道德の帶にして、又其本源である。吾人は今日我が教育界を見渡して、其餘りに乾燥無味なるに驚かざるを得ない。愛情の濕氣なき教育界は、乾燥無味である。愛情の活動せざる教育は器械的である。吾人は現下教育界の狀態に鑑み、實に下の如く絶叫するを禁

と得ない。汝真正の教育を施さんと欲するならば、先づ汝の愛情を發揮せよ。然れども是れ吾人の言葉ではない、二千年前基督が吾人に與へたる教育の秘訣である、眞諦である。

第三 眞正の教育は説明にあらすして實例である。基督は愛を説明せし爲めに大なりしにはあらず、之を實行せしに於て大なりしなり。基督以前に於ける哲學者、教育者、宗教家にして、基督よりもより多く精細なる説明をなし、原理原則を立てたるもの、固より其人に乏しくない。併しながら、彼等が長舌の説明も、感化

の實績を擧ぐるに於て、比較的効果の鮮少であつたのは、何故であらふ。獨り我基督に至つては、全然其趣を異にして居る。彼の一生は四福音書に於いて看取することゝ出来る通り、流星に似たる僅々三年の公生涯は、其日月のやふな明白なる實行に由つて、千載不朽となつたのである。思ふに教育上、此の實行の點に關しては、ペスタロッチ及びフレールは、特に注意を拂つたもの、如く見へる。ペスタロッチ曰く「余は生徒を教育するに當つて、説明を與へしこと稀なり。故に宗教及び道德を教ふるに當り、説明せしが如きは固

より極めて稀下ある。生徒の余の首を抱き戯れつゝ、余を父よと呼びし時、余は曰く、汝は余を父と呼ぶ、是甚だ良きことである。然れども父と呼ぶ余を欺くこと、果して善なることであるか」と。ペスタロッチの教育法概ね此の類である。是れ教育家の教育家たる所以である。ペスタロッチは今を去る百有餘年前瑞西の教育家で、基督は今を去る二千年前の宗教家である。然るに基督はペスタロッチに先んじて、早く既に實踐教育を行はれた。天下何者か此の基督の實例より大なる實例があらふ。己が身を天下の衆生に與へて、十字

架にかゝると云ふ此の一事よりも、より大なる犠牲献身は、余輩の未だ曾て發見する能はざる所である。基督教と他宗教の異なる所は、要するに説明と實例との相違である。見よ、基督の神の愛を説くや、自ら其愛を實行して人に示し、而して後、神は愛なりと宣言し給ふたではないか。かくして漸く實踐的道德に説き及んで、茲に始めて汝等互に相愛すべしとの教を垂れ給ふた。世に忌むべきもの多くある中にも、實行の伴はざる親切なる言葉ほど、忌むべきものはあるまい。余曾て米國に在つた時、日曜日には必ず教會に出席した

が、其面識の或一人、郊外に於て余に逢ふ毎に、余の手を堅く握つて、「余の親愛なる兄弟よ」My dear brother. と云つた。併しながら、余は其都度思ふよう、此人は眞實に余を兄弟の如く愛するものなりや否やと。若し果して眞實に愛したのであつたならば、かゝる疑念は一毫も余の心に萌さなかつたであらう。愛は疑惑を許さない。既に余の心に、其人の愛情如何を疑ふ所以のものは、直ちに是れ其人の余を愛して居ないことを表現するものではないか。而して、斯の如きことは、往々神聖なる我が宗教界に於ても有り勝ちのことである。

譬へば教會の内に兄弟姉妹なる言葉が流行する。余は敢て流行と云ふ。頭を垂れて祈禱會に列すれば天父に向て、兄弟姉妹を憐み給へと云ふ。咄々偽善も甚し、自ら省みて日常を思へば、其心常に兄弟姉妹を憎んで居らないか。兄弟姉妹と云ふ言葉は甚だ麗はしい、左りながら實行の之に伴はざるに於ては、其美はしき言葉も、畢竟蛇の斑點の麗はしきが如く、其麗はしきは、却つて忌むべきもの、最も大なるものとなる、慎まざるを得ないことである。教育家も、宗教家も、此點に付ては須らく麻を着、灰を蒙つて悔改めてよから

う。形式的忠君愛國、形式的博愛主義は共に末法末世の汚物、一日も早く滌ぎ取らなければならぬ。基督教の宗教は哲學でない。原理原則を組織することでもない。口にする所、之を手にし、手にする所、之を斷行することにある。天父の愛は、身を以て之を社會に實現することである。基督は、愛を説明するに於て大なるに非ずして、之を實行せしに於て大であつたのである。第四 眞正の教育は多方面に興味を起さしむることである。

我國に於て、一時教育界を騒がしたるものは、ヘルバ

ルトの教育主義であつた。而して、此ヘルバルトの教育主義の中に於て、多方面に興味を起さしむると云ふことは、至極我輩の心を得たるものであつて、且つ我輩の最もヘルバルトに感謝する所である。教育は事々物々興味を起さしめずしては、成功することが出来ない。先づ第一教師其物が生徒に對して、興味を標的であらなければならぬ。而して教ふる學課、云ふ所の説、悉く其中に興味がなければならぬ。斯く論ずると、教育に興味を起すことは、獨りヘルバルトの發見に屬するが如く思はるゝなれども、是亦曩きに、基督の吾人

に教へられたる處である。實にや、基督の教を胸中に
 入れ、然る後、學問をなし、社會に處するときには、百
 端千緒、觸目の事物一として興味の花を開かずして來
 らざるものはない。世人或は思へらく、基督信徒の人
 生觀は、多く是れ樂天的である。然り余輩の人生觀
 は樂天的である。基督の教旨に基て人生を觀する時は、
 誰か又厭世悲觀の念を起すものがあらう。恰も詩人が
 天地萬有に對して、一木一草の微に至るまでも、悉く
 涙の溢るゝやうな情味を持つてゐるが如くに、余輩基
 督信徒の眼中には、人生其物が、興味、靈塊となつて

顯はれるのである。勿論、人生は樂みのみでなくつて、
 悲み、嘆き、苦み、憂ひが、降りつむ雪のやうに、何
 時とはなく身邊に襲ひくるけれども、しかも尙保羅の
 云ふたやうに「艱難にも尙歡樂を爲す」所以は、つま
 り人生其物に大なる興味の存することを發見するから
 である。余曾て金森通倫氏が、基督教は五倫の味付け
 なりと説かれたることを記臆して居る。最早や二十餘
 年を経過した昔のことで、其大体の趣旨は忘れたけれ
 ども、この語は今尙耳に残て居る。基督教は五倫の味
 付けなりとは、實に面白き語ではないか。神は人類の

父で人は互に兄弟姉妹なりとの意味より、古來支那人が言ひ做したる四海兄弟なる語を解釋すると、實に深き意味を顯はすに至る。此の意味に於て、人倫五常の道を説くときは、親の子に對し、子の親に對し、夫の妻に對し、妻の夫に對すること、一層深き關係と意義とを有するに至るのである。基督信徒が世の人々よりは、比較的熱心に人道の爲めに働く所以のものは、人倫を解釋する上に於て、一層の興味を感ずるが爲めである。茲に於て乎、リヴリングストンは、英國の文明社會を去つて、亞非利加の砂漠に、其芳骨を埋むる

ことを厭はなかつた。茲に於て乎、ジョン、ハワードは、富豪の生活を捨て、牢獄や傳染病院に入り、蜜の滴るが如き愛情を、囚人や病者に濺で吝まず、扱ては又フアーザー、ダミアンが、佛蘭西の美はしき生活を棄て、「モロカイ」島の癩病殖民地に朽ち果つるを厭はなかつた理である。余の曾て同志社にあるや、之を天文学の教師に聞いた。曰く「余は生れて以來、二大世界を發見した。一は天文学を學んだ時、廣大無邊なる宇宙の構造を見て、地球の大も罌粟粒の如きに過ぎないに驚き、二は基督教を信じて、人生觀に變更を

來たし、之が爲め恰も二大世界を發見したるが如き感想を懐いたこと即ち是れである」と。洵に至言と云はねばならぬ。余も亦實にしか感ずるものである、天地の造物主は、吾人の父にして、我等は互に其兄弟姉妹である。而して此の所謂娑婆世界は即ち人間修養の教育場で、此處を卒業するに至らば、人は朽草腐木と共に黄土に化するものではなく、慥かに永遠の生命に入つて、靈的生活を爲すことが出来ること。かう云ふ美妙にして而かも崇高なる福音は、人間其物に幾層の價値を添へ、併せて深遠なる意味を人生に與ふるものである。

る。既に人間相互の關係に於て、又人の此世に處する上に於て、此の如き意味を有せしむるならば、基督の吾人に與へたる興味インテレストの教育は、彼の眇たるヘルバルトのそれに比して、幾百倍の強大なる教訓であつたか、固より知るべからざる程である。基督はヘルバルトの如く、殊更に趣味の教育と云ふ言葉を用ひなかつたけれども、基督の人生觀及び倫理觀が、既に深大なる興味たることは疑ふべくもない。基督教的思想を以て書かれたるロングフェローの「人生の詩」は之を讀むものをして、恍として興味の甘酒に酔ふが如き思あらし

む。それは詩の語句其物に興味あるにあらずして、ロ
ングフェローの人生觀及び倫理觀が、此の如き興味を
起さしむるからである。吾人は敢て此の詩を基督教の
觀念に本づきて書かれたるものであると謂ふ。蚯蚓は
鶴の聲を出すことが出来ない。誰れか咒咀の口を以て、
讚美の詩を歌ひ得よう、宇宙は一の美術で、人生は生
ける繪畫である。石に枕し、「サタン」に撃たれて尙天
の樂を歌つた古聖ヨブは、稍々興味を解し得たるもの、
其興味の全部を取つて、直に吾人に植へ附けたる基督
は、誠に大教育家と謂ふべきではないか。

第五 眞正の教育は自然を學ぶことである。
學問を爲すに當り、其學ぶべき場所は、教場や、家庭
のみであると思ひ、是等の外に逍遙して、天地宇宙の
大氣に觸れないものは、眞善美を觀念を得ることが
出来ない。勿論、家庭の中に於て學ぶ教育や、學校に
於て受くる學課は、必要であるに相違ない。併しこれ
のみを以て學問なりと云ふは、誤謬の甚しきものであ
る。余曾て學生たりし時、ギョーの地文學を學んだこ
とがある。慥か記憶に存する所に誤なかりせば、開卷
第一ページに、人間の地球に跨がつて、ペンを持つて

居る所が書いてある。而してギョーは其下に句を附して、「地球は人間を教育する舞臺なり」と書いて居る。洵に味ふべき言葉である。不信仰にして淺薄なる科學者は、屢々説を爲して、「若し神が慈愛心に富むならば、なせ此地球に天災地妖があるか」と言ふ。かゝる小供とみたる議論に筆を染むるは、元より我輩の意でないけれども、其天災地妖こそ、即ち他の一面より神の慈愛心を現はすものでないかと、反問したい。人は自由意思と云ふ貴きものを有して居る。故に天災や地妖や其他幾多の不如意によりて、其靈性を琢磨し鍛錬する

のである。慈母の涙は愛であつて、嚴父の怒は愛でない。と云ふ理屈は何處にある。神は義の神であつて、又愛の神である。此神の下に秩序正しく支配せられてゐる宇宙其物は、即ち吾人を教育する絶佳絶美の材料ではないか。強て天文學者の如く星を數へざるも、敢て地質學者の如く砂を驗べざるも、よしや一風白く吹き渡る秋の夕べの枯野の裾に筈を停めて歌を詠まざるも、天地は永久に、而して何人にも、求むるものに、其甘美なる秘密を囁き得るのである。思ふて此に至るときは、ギョーの言葉の今更の如くに繰返される。曰く

「地球は是吾人を教育する舞臺なり」と。第十八世紀の哲學や教育が、無味乾燥に陥つたとき、革命の健兒ジヤンジャック、ルイソーなるものが起つて、大に其器械的流弊を痛罵し、「自然に歸れ」(Return to Nature)と絶叫した。それから以後ペスタロッチやフレーベルの徒が其轍を履むで、懇ろに自然に歸るべきことを説明したものであるから、十八世紀の末葉より、十九世紀の初めにかけて、彼等を謳歌するもの喧々囂々として、歐米の教育界は一時騷擾を極めた。且又詩人の側に於ては、湖畔の詩人ウオーズウオースの如き、流麗にし

て而も深遠なる思想を以て、朗かに自然の美を歌ふた。左に引用せる二首の如きは、又以て其幾分の消息を窺ふに足るものであらう。

緑したる、森かげに、世のよしあしや、人のさが、
聖にまして、をしふなり。

An impulse from a vernal wood,

May teach you more of man,

of moral evil and of good,

Than all the sage can.

人のなさけは、すさまもある、賤が伏屋に、やどるな

り。日々ををしふる、書の師は、きよき小川や、ふ
かき森、星の空なる静黙や、さびしき岡の、寂寞ど。

Love had he found in huts where poor men lies,

His daily teachers had been woods and hills,

The silence that is in the stary sky,

The sleep that is among the lonely hills.

實に教育上見逃すべからざるは、天然の勢力である。
余昨春奈良に旅行した節、貴婦人會より招かれて、高
等女學校に於て、一場の演説をした。奈良の人々は、
教場が狭いだの、文部省の規定通りにせねば教育は出

來ぬなど云つて、頻りに愚痴をこぼして居るから、
我輩は左の意味の演説を試みた。

諸君が文部省規定通りの學校のみで、教育を受けね
ばならぬと思ふならば、其結果として、文部省規定
通りの人間が出来る。左りながら、教育は自然を尙
ふ。九尺二間の家屋や、百坪二百坪の學校のみで、
教育せらるゝのみが、教育でもあるまい。余輩の見
たる所に依れば、奈良は諸君を教育する天然の一大
教場である。明月の三笠山、緑りの若草山、若くは
猿澤の碧水や、古色蒼然たる春日神社や、奈良全体

が即ち天然の公園で、諸君を教育する真正の教場である。個様な美はしき天地に住みて、学校や家庭のみで教育を受けんとするは、誤りではあるまいか、諸君の御一考を煩はしたい。我輩は今日に於ても、亦しか信するものである。思ひ起す、余が十九歳の時、將さに笈を負ふて京都同志社に遊ばんとするに際し、友人手塚南東が一首の詩を賦して、余の行を壯にしたことを。忘れ易き余の脳髓にも、尙忘れ難き此の詩は

天文地理皆有教

豈唯學圃讀書知

東山之秀 鳧川美

俯仰須探造化奇

詩の巧拙は姑らく問はず、直観して其意味に想到すれば、殆んど幽味津々として盡きざるを覺ふ。青帙黄卷古書舊本、是豈に獨り學問ならんや。小閣き圖書館の窓の下に、青息を吹て得々たるものは、宜しく此詩を三讀するがよい。げにや宇宙は一の大學校、山嶽河海は其一大書籍、而して神は實に其教師である。「自然に歸れ」とはルソーやペスタロッチによりて叫ばれた動議で、洵に時勢の要求に應じたものであつたけれども、之を彼等の創思でもあるかのやうに云ふは、蓋し

歴史的考證を怠つたもの、僻論。知すや、基督は既に二千年前に自然教育を道破せられたではないか。自然の感化が、人間生命の上に大影響を及ぼすものであることを認識せられた故に、衣食住の煩ひに維れ日も足らざる哀れなる人間に教へられた言葉は、色即是空の冷かなる哲理でもなく、古木寒巖に憑るやうな訓誨でもなかつた。天の鳥を見よ野の百合花を見よ、稼がす、紡がす、勞めざるなり。明日爐に投げ入られる草、其草にさへも、神はソロモンの榮華の装ひにも優る程の美はしき姿を興へ給ふ、それに人類たる汝等は、何故

思ひ煩ふのであるかど。一片の百合花を藉つて、千代不易の大鏡案を下された。ア、如何に美はしき言葉であるか。天然を除外して、かゝる言葉が争かで乎能く發し得らるゝものであらう。基督の自然教育は夫のみではない。種蒔、漁業の話、無花果、葡萄園の比喻等簡易にして明瞭、眞率にして而かも玲瓏たる思想が、宛ら玉笙を通じて出る金聲の様に、一々自然の材料より湧出でゝ居る。基督は一つの會堂をだに有たなんだ所爲か、有名なる説教は、悉く山上や湖畔と密接なる關係を持つて居る。是れ寧ろ不思議のやうであるけれ

ごも、決して不思議でない。天然の感化を受くるもの
大なるものは、最も天然を愛するものである。風水を
涉つて、水、紋を織るガラリヤの湖畔、舟を泛べて岸
邊の人に教を説ける人を想像せよ。此の人は曾て天然
を厭ふた人であつたか。若くは酸素饒多にして空氣の
至て清潔なる山上に、颯々たる松風に吹かれつゝ、道
を傳へたる人を想像し見よ。其人は曾て天然を厭ふた
人であつたか。山上の垂訓は何處より來りしか。五千
人の聽衆は如何にして何處に集められしか。絶へて境
遇に支配せられしことなき基督でさへも、天然は尙偉

大なる感化を其靈性に及ぼしたるが如く考へらる。斯
の如く觀じ來れば、基督の性格こそ實に慕はしい。蒼
空は高く彼の爲めに天蓋を覆ひ、荒野の芝生は彼の爲
めに廣く毛氈を布いて居る。俯仰介立、師となり友と
なるものを、隨所の山川に求めて、獨り無限の興に入
られた。獨り其興に入られたけでなく、衆と共に
屢々其興を俱にせられた。又俱にせんことを人に教へ
られた。所謂自然教育は、基督に於て始めて其眞意義
を發揮したのである。我國の學者、動もすればルソー
、フレイベル、ペスタロツチの所説を讀んで、恰も

天雷にでも撃れたかの如くに喫驚するを以て常とすれ
ども、我輩は聊かも喫驚しない。若し吾人が四福音書
を讀むに先ちて彼等を讀んだならば、或は我國の學者
の如く、其自然教育に驚いたであらう。が、しかし我
等は四福音書に於て、既に富士山の絶頂に攀ち登つて
居る。極目の大觀を白山に縦するも、筑波山に横する
も、固より驚くべき道理がない。我輩の淺學も尙多少
ルソーに付て學むだ。彼の教育が、我國現下の教育
の比にあらざるを知り、且つ其相違の雲泥も啻ならざ
るに、痛く驚くことを禁じ得なかつた。然るに此の驚

嘆の念慮を以て、更に驚かされたるものは、我が主基
督の自然教育が、彼等に比して一層嶄新で、一倍健全
で、更に一層平易であることを發見した時であつた。
苟も四福音書を精讀したるものは、吾人の言の荒唐に
あらざるを悟るであらう。兎も角も此の點に於て、聖
書は宗教的に偉大なるのみならず、教育的に於ても、
亦偉大なる書籍たるを疑はない。
以上述べ來りしが如く、基督は此五個の教育主義を吾
人に教へられた。基督を God-man (神人) と呼ぶは即ち
人にして神、神にして人であること云ふ意味であらう。

神として固より人間に勝り給ふは勿論、人としても亦東西古今の偉人傑士に優り給ふことを信ずる。余輩はルーツのみを讀まば、其偉大他に比なきを思ひ、ベスタロツチのみを讀めば、其偉大世に倫びなきを感ず。去り乍ら、一たび基督にもどりて彼等を比較するとき、基督は教育家としても、優に彼等に超越し給ふことを發見するのである。句に言はずや、

いろくの菊や白きにみもどりぬ
黄、紅、白、紫、千種萬態の菊花が今を盛りと咲き亂れて、何づれ劣り優りのないやうであるが、よく

見て居ると、黄の俗氣厭ふべきあり、紫の妖に傾き、紅の艶に過ぎたるなど、思はぬ邊に穴がみゑ初めて、矢張一番先きに見た白菊の純清潔白にして氣高いのに、再び見もどつたと云ふのが、此の句の意味であらう。余輩もそれと感を同ふして幾回か世の學者、哲人、教育家、宗教家に點々洒らし來つた眼を轉じて、吾が榮光の主基督に見もどらんければならぬのである。是即ち吾人の基督を大教育家中の、更に最も大なる教育家であると言ふ所以である。

基督の教育法終

明治卅六年六月十二日印刷
明治卅六年六月十五日發行

定 價 金 五 錢

著 者

東京府北豊島郡巢鴨村大字巢鴨
二六一七家麻學校

留 岡 幸 助

發 行 者

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

福 永 文 之 助

印 刷 者

橫濱市太田町五丁目八十七番地

村 岡 平 吉

發 賣 所

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

警 醒 社 書 店

印 刷 所

橫濱市山下町八十一番地

福音印刷合資會社

留岡幸助著

慈善問題

定價金貳拾五錢
郵税金四錢

慈善問題を滞りなく解釋せんと欲せば宗教より出づる熱愛と學術の與ふる光明と兩ながら併行せざるべからず、本書は即兩者を融化調和せんと試みたるものなり。

留岡幸助著

不良少年感化事業

定價金貳拾錢
郵税金四錢

犯罪人研究は最重要なる社會問題の一たり、本書は犯罪人の減少を計り國家の健全を保たんとする根本的方策は不良少年の感化にあるとを説き、其方法を論じたるものなり。

留岡幸助編著

監獄改良

定價金貳拾錢
郵税金四錢

監獄事業は單に法理問題又は政治問題のみに非ず、特に犯罪人の感化に付ては必ず先づ宗教的信念と慈愛の情とをなかる可からず、本書は即此點に付き著者の意見を述べて江湖の宗教家、慈善家、裁判、警察、監獄官等に對して著者の希望を述べたるものなり。

留岡幸助翻譯

犯罪者の教育

定價金四拾錢
郵税金六錢

犯罪者の教育は非常に困難なる問題なり、米國新約克州「エルマイラ」感化監獄主任醫ドクトル、ウエー氏は學術上及實驗上より立論して犯罪者の教育は先第一に其身体の不健全と不規定の點とを矯正するにあつて、其方法を論じたり、蓋し最も進歩せる説なり。本書は其著を翻譯せしもの教育家、監獄官及父兄等の必ず一讀を要すべきものなり。

留岡幸助著

家庭學校

定價金貳拾五錢
郵税金四錢

不良少年感化事業の重大なる問題たることは近來世人の均しく注目する所となれり、本書は著者の管理せる家庭學校に於ける近來の教育的實驗を記録したるものなれば依之不良少年一般の狀況及其感化の方法に對する大体を知ることを得べし。

留岡幸助著

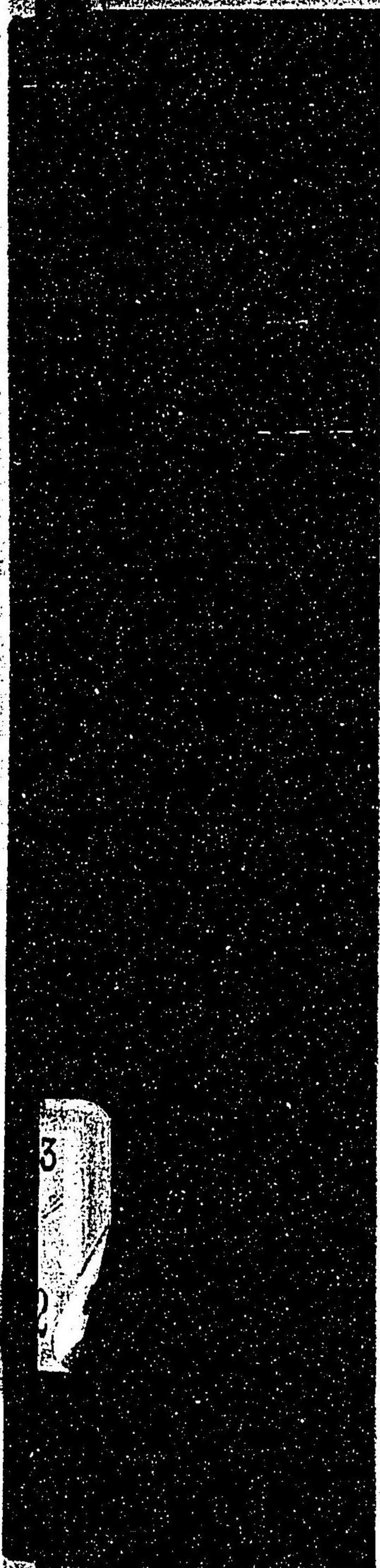
家庭學校

定價金三拾五錢
郵税金六錢

人生は恰も一大葡萄園の如し

定價金五錢 郵税金二錢

S-48



3
2

